男性の家事・育児参加の抑制要因

19151915　鐘島千晶
指導教員　立木茂雄
（総文字数　20,837 字）

男性の家事・育児参加の抑制要因

19151015　鐘島千晶

近年「イクメン」という育児を楽しむ男性像が広く認識されている.女性に限らず全ての労働者に育児休暇取得が可能な状況下で,男性の取得率は 2017 年度で 5.14%（総務省 2018）と女性の同年の取得率 83.2%に対して低く留まっている.本研究ではこの現状と男性の家事労働参加への国や職場の応援の姿勢と受け取れる体制との間にずれがあることに疑問を抱き,参加が抑制される原因は男性だけにあるのではないのかもしれないという考えのもと,女性が持つ男性の家事・育児参加の抑制要因について検討した.妻の家庭責任意識,妻の世帯収入貢献比率,妻の愛による再生産役割因子,妻のゲートキーピング説の 4 つを抑制要因と仮説立て分析を行った.そして,妻の世帯収入貢献比率と妻の愛による再生産役割因子が抑制要因,妻のゲートキーピング説においては部分的に抑制要因と言えるという結果が得られた.妻の家庭責任意識については,夫の家事・育児参加に対して抑制の働きかけは見られず,反対に促進される効果を持っていた.

【キーワード】イクメン,男性の家事・育児参加,夫婦間の家事労働分担

【目次】

1　はじめに……1
1.1　研究の背景……1
（1）「イクメン」という言葉の普及……1
（2）現状……2
1.2　先行研究……3
（1）家事労働について……3
（2）家庭責任意識……3
（3）世帯収入貢献比率……4
（4）愛による再生産役割因子……5
（5）Maternal Gatekeeping　母親のゲートキーピング説……5
1.3　本研究の目的と意義……6
2　方法……6
2.1　調査の概要……6
2.2　変数作成について……7
2.3　仮説……9
3　結果……10
3.1　回答者の家事・育児の現状……10
3.2　多項ロジスティック回帰分析の結果……11
4　考察……16
5　結論……18
参考文献

1　はじめに

1.1　研究の背景

(1)「イクメン」という言葉の普及

「イクメン」とは，育児に積極的な男性，育児を楽しむ男性のことを指す造語であり，近年広く認知されている．厚生労働省によると，「子育てを楽しみ，自分自身も成長する男性のこと．　または，将来そんな人生を送ろうと考えている男性の」がイクメンとされている．魅力的な容姿をした男性に対しての誉め言葉であるイケメンを文字っているこの言葉も，良い意味合いを含んでいることを喚起させる．イクメンは，2010年6月に長妻昭労働大臣が国会の場で，少子化打開の一策として「イクメンという言葉を流行らせたい」と発言したことや，働く男性の子育て参加や育児休暇取得促進など社会の気運を高めることを目的とした「イクメンプロジェクト」が厚生労働省によって始動したことをきっかけに新しい言葉として社会に浸透した（厚生労働省 イクメンプロジェクトホームページ）．そして同年の新語・流行語大賞にトップテン入りするなど，イクメンという言葉が流行ったことは間違いない．そのことを反映するように，翌2011年には映画「うさぎドロップ」，ドラマ「マルモのおきて」等男性が育児に奮闘する様を描いた作品が多数公開され，話題となった．

一方でイクメンという男性像が広まった数年後，2017年の新語・流行語大賞には，「ワンオペ育児」という語句がノミネートされた．ワンオペとは，主に飲食店で深夜など人手が不足した状況下で1人の従業員がすべての工程・作業を行う様を言う（朝日新聞デジタル　コトバンク「ワンオペ育児とは」）．2014年ごろからこの本来の意味でのワンオペへの批判的注目が強まり，その勢いに乗って現れたのがこの「ワンオペ育児」である．1人で家事・育児の大半を担う状況を表しているワンオペ育児という言葉が多くの人々の共感を得たのには，大きく2つの背景があると考えられる．ひとつは時代に伴い共働き夫婦が増加したこと，2つめは「イクメン」という男性像が浸透しすぎたことである．一部のイクメンが肯定的に取り上げられたことで，多くの妻に，夫である男性が家事・育児を行うことが当たり前のことだという考えが根付いた．実際自身が行う家事・育児の負担の大きさに変化がなくとも，性別役割分業についての意識に変化があったために，自身の置かれた状況に疑問や不満を感じた声が高まったのではないだろうか．このように，男性の家事・育児に注目が集まったことは夫婦の家事労働の在り方，考え方に変化を与えた．

育児は非常に多くの時間を費やす行為であり，共働き夫婦が増えている中，育児休暇制度は多くの家庭にとってとても重要な存在である．日本で最初に育児休暇に関しての法律が成立したのは今から40年以上も前，1975年のことだった．しかし，この時点では男性には育児休暇取得は可能にならず，女性に関してもすべてに取得可能となったわけでもなく，公務員である女性教師や看護婦・保母が対象とされた．その後1991年に育児休業法が成立されたことにより，育児休暇が女性に限らずすべての労働者にとって取得可能なものとなった．

では，育児休暇制度は実際にはどれくらいの労働者に利用されているのだろうか．男性の育児休暇取得率は2016年度3.16%(総務省 2017)，2017年度5.14%(総務省 2018)となっている．対して女性は80%を超えており，ここに大きな男女差がみられ

る．男性においての 2016 年度から 2017 年度にかけての 1.98%の伸びは大きいと言える．しかし政府は 2020 年の男性の育児休暇取得率 13%を目標に掲げており，その実現は困難に思われる．近年イクメンが働きやすいような環境，すなわち働きながら安心して子どもを産み育てることができる労働環境の整備推進を目的に，規範となる企業や個人を表彰する「イクメン企業アワード」また「イクボスアワード」という賞が贈られたり(厚生労働省 2017)，男性の育児休暇取得率が高い企業ランキングが発表されたりしている．このようにイクメンであることやイクメンを応援する環境が評価の対象となっていることも間違いないだろう．イクメンに似た「カジメン（家事に積極的な男性)」「イクボス（部下のワーク・ライフ・バランスの充実を応援し，自身も仕事と私生活の両立を楽しんでおり，また仕事面で業績も出している上司)」のような新しい造語も生まれ，イクメンと同様世間から肯定的なイメージを抱かれている．

(2)現状

前述のように，すべての労働者を対象に育児休暇制度が設けられている中で，その取得率には大きな男女差がある．しかし，そもそも男女では雇用状況が異なっている可能性があるため，ここで雇用面の現状を見ていきたい．

平成 29 年労働力調査によると，男性では，正規の職員・従業員が 78.1%，非正規の職員・従業員が 21.9%であるのに対して，女性では正規の職員・従業員が 44.5%，非正規の職員・従業員が 55.5%という内訳である(総務省統計局 2017)．この男女の雇用状況を比較すると，女性と男性の労働者全体に占める正規雇用者の差が 32.9%も開いており，男性のほうがその割合が大きいことがわかる．また，全ての産業に従事する労働者の平均週間就業日数は男性が 5.1 日，女性が 4.9 日であり，平均週間就業時間は男性で 43.6 時間，女性で 32.9 時間であった（総務省統計局 2017)．平均週間就業日数に関しては男女差は 0.2 日と小さいものだったが，平均週間就業時間を男女で比較すると，10.7 時間男性のほうが多くなっている．平均週間就業時間においての男女差は大きなものであり，この大きな男女差は家庭での家事労働時間にも影響をもたらしていると思われる．

続けて平成 28 年社会生活基本調査から家事関連時間の現状を見てみると，夫の 1 週間あたりの家事関連時間が 1 時間 23 分，妻の家事関連時間は 7 時間 34 分であった．6 歳未満の子を持つ世帯の妻は，過去 20 年間で家事時間が 1 時間 1 分減少する一方，育児時間が 1 時間 2 分増加した．夫については，家事時間が 12 分，育児時間が 31 分の増加があり，介護・看護や買い物を含めた家事関連時間全体でみると，妻は 4 分の減少とほぼ横ばい，夫は 45 分の増加がみられた．また同調査で共働き世帯について，妻の生活時間は仕事等が横ばい，家事が 19 分減少する一方，育児は過去 20 年間で 37 分増加した(総務省統計局 2016)．ここで男女別に家事時間の構成比をみていくと，男女ともに「食事の管理」が最も多く，女性では家事時間全体の 50.0%を占めている．また，育児時間の構成比は，夫は「乳幼児と遊ぶ」が 44.4%，妻においては「乳幼児の身体の世話と監督」が 49.5%となった(総務省統計局 2016)．男女ともに，限られた家事・育児に充てられる時間のやりくりの結果として，家事よりも育児に注力しているのだと推測できる．イクメンブームの到来により，家事・育児よりも育児そのものへの関心が高まっているのかもしれない．

1.2　先行研究

（1）家事労働について

マルクス主義経済学の枠組みの中では，家事労働は社会的価値関係からは遮断された存在とされている．その理由は，家事労働が商品生産に直接関係しない，労働力を供給し再生産するために家族の中で行われる私的な労働だからである．そのため，家事労働はいわゆるシャドウ・ワークとして存在し，位置付けられてきた．しかし，家事・育児・介護の面で賃労働によるサービス商品の利用頻度が家庭内で高まってきており，この変化は「家事労働の社会化」と言われている．服部（1993）はその変化の原因の一つに家事労働の担い手の減少をあげる．主たる担い手すなわち女性が正規・非正規を問わず社会的労働に従事することは家族セクターにおける総家事労働時間の減少をもたらす．家族である以上，夫である男性も，家族メンバーとしてこの家事労働時間の減少を補うかたちの分担を行い家族としての家事労働時間はさほど減少しないと想定できる（服部 1993）ものの，家事労働時間の限界から，現代人は商品化された家事労働サービスや家事労働節約の機能を持つ商品をより多く利用するようになっていくという考察がなされている．

このように，古くからシャドウ・ワークとして女性が負担してきた家事労働であるが，女性の社会進出等社会の変化により家事労働そのものも変化してきている．服部（1993）の言うとおり，「家事労働時間の限界から，商品化された家事労働サービスや家事労働節約の機能を持つ商品をより多く利用するようになって」いるのだ．しかし，家事労働短縮，すなわち便利グッズのうち手軽なものが普及しても，家事を代行してもらうようなサービスは一般的な家庭にとっては馴染みのある存在とは言えないだろう．共働きという「妻（母親）が働いている」,「そのために家事労働すべてに手が回らない」そうした状況になった時，多くの家庭に浮かぶ考えは「分担する」ことではないだろうか．夫という立場の男性が家事・育児等の家事労働に参加することに影響を及ぼすもの，あるいは執筆者が影響をもたらしているのではないかと考える先行研究を以下に示す．

（2）家庭責任意識

中川（2010）は，妻の家庭責任意識が夫の家事・育児参加に影響しているか，そして妻の家庭責任意識が就業の有無や相対的資源から規定されているのかについて研究している．家庭責任意識とは，家事・育児への責任意識のことを指す．中川（2010）は，東京大学社会学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「現代核家族調査,1999」（家計経済研究所）の個票データを用いて分析を行った．用いられたデータの調査対象は首都 30 ㎞圏在住で，妻の年齢が 35～44 歳であり，夫と長子が小学生から高校生である子供と同居している核家族世帯 2000 世帯である．そして中川（2010）の研究は有配偶かつ末子 12 歳以下の妻に限定しており，その該当分析対象者は 682 人であった．妻の年齢や学歴，就業の属性や相対的資源差，家庭内需要，時間的余裕がどのように妻の家庭責任意識や妻が行う家事・育児，また夫の家事・育児参加に影響するかが記述統計とパス解析によって分析された．分析の結果，妻の責任意識は，妻が高い学歴をもち，就業することでそれが弱くなるが，中でも夫のほうが妻より年齢が高く，夫の家計負担比率が多く，末子年齢が高いことで強まる（中川 2010）．妻の強い家庭責任意識が夫の家事・育児参加を直接少なくし，また妻が家庭責任意識に基づいて行う家事・育

児の多さが，夫婦間の年齢差や学歴差等の他の相対的資源差よりも強く夫の家事・育児参加を制約することも明らかにした．

これは妻自身が家事や育児を妻である自分が行うべきだという性別役割分業意識的な責任感を抱いており，その責任感のもと多くの家事・育児をしているという考えだ．このような家庭責任意識を強く抱く妻は，夫に家事・育児を分担されることに嫌悪感や罪悪感のようなものを抱くのではないだろうか．

（3）世帯収入貢献比率

島（2011）は，社会経済的地位が低い夫にとって妻の就労は稼ぎ手としてのパワーを奪う「脅威」であり，彼らは妻の就労によってむしろ性別役割分業規範に固執するようになるのではないかという仮説のもと，第 2 回と第 3 回全国家族調査データを用いて，妻の就労が夫の性別役割分業意識に与える影響に夫の社会経済的な地位による違いが存在するかどうかを検討した．分析の結果，妻の就労が夫の性別役割分業意識に与える影響は，夫の社会経済的地位によって異なっているということが明らかとなった．妻の家計貢献度が高い夫ほど性別役割分業を否定する傾向は，短大・専門卒以上，ホワイトカラー，年収 400 慢円以上といった，社会経済的地位がより高い層においてより顕著であることが示された（島 2011）．そして高卒以下，ブルーカラー，年収 399 慢以下というような社会経済的が比較的低い層の夫では，社会経済的地位が高い夫と比較して性別役割分業を否定する傾向がより緩やかであるという結果となった．

島（2011）の研究により，妻の収入貢献が夫の性別役割分業意識の高さに影響を持つことが明らかにされ，また，収入の高い妻を持つ自身の社会経済的地位が低い夫ほど性別役割分業意識にやや固執するという結果が得られた．性別役割分業意識を強く抱く男性の家事・育児参加が少なくなることは多くの研究で言われており，ここから社会経済的地位の低い夫は妻の家庭外の仕事を理由に自分が家事・育児分担を請け負うことにも不満を持つ傾向があることが推測される．

また，妻の家計貢献という点に関連して，共働き夫婦の妻が夫の家事・育児参加をどのように評価しているかについても触れたい．久保（2016）は，6 つの仮説をもとに夫の家事・育児参加への妻の評価について分析をしている．ひとつめは夫の家事・育児参加が高い場合にはそれに対する妻の評価が高いことである．2 つめは妻の経済状況が夫の家事・育児参加への評価を左右するというもので，経済的に不安定な妻は夫との衝突を避ける傾向にあり，正規雇用等経済的に安定している妻は夫との衝突を恐れること無く家事・育児参加を要求し，評価も厳しくなる．3 つめが男性の育児参加を支持する意識がより高い妻は夫の家事・育児参加への評価が低くなるという仮説である．4 つめは妻の仕事と家庭への葛藤が強いと夫の家事・育児参加に対しての評価が低いというもので，5 つめは夫の収入の高さが妻の評価を高めるというもの，最後に 6 つめが妻の夫の家事・育児参加を支持する意識が低い場合に対して，夫の参加が高い場合に妻の評価が高くなるという仮説である．分析には 2013 年 11 月実施の千葉県西部の公立保育所 21 保育所の保育園児の保護者を対象とした質問紙調査「子育てと仕事の両立に関する調査」の結果が用いられた．

重回帰解析と分散結果の結果，従属変数夫の家事・育児への妻の評価は，実際の夫の参加に加えて，上記仮説 3 と仮説 4 で説明できるということが判明した．妻の「男性の育児参加を支持する意識」が高いと，夫への期待も大きくなり評価が厳しいものとなる．ま

た，妻が仕事で忙しく自身の家事労働時間が短くなる場合にも，その分夫の参加に期待が高まり，期待と現状の差が評価に作用する．夫の参加が実際に高い場合には，妻の評価には妻のジェンダー意識の影響は認められなかった．この久保（2016）の分析結果から，世帯収入貢献比率の高い妻は自身の家事・育児への時間的圧迫のある状況から夫に参加を望み，また夫の参加に対しての評価は厳しくなると言える．このようにイクメンという言葉や，男性も家事・育児に参加するというイメージの広がりにより，女性の男性の家事・育児参加に対しての評価が厳しいものになってきている．

（4）愛による再生産役割因子

大和(1995)は，性別役割分業意識の構造を因子分析し，2 つの次元が併存しうると二因子を抽出した．因子分析に用いたのは，近畿圏の 4 つの高等学校（うち 3 校が公立共学高等学校，1 校が私立女子高等学校）の卒業者名簿から 1965～66 年卒業の女性を 1449 名選んで，彼女たちを対象に実施した郵送法での調査から得られたデータである．抽出された 2 因子のうち 1 つめは「性による役割振り分け」の因子であり，性別によって適性や役割を固定的に振り分けるという論理に基づき女性の家事育児役割を正当化するものである．例えば,「家事や育児をするのには，男性よりも女性が適している」という考えや,「政治のような国や地域などで重要な決定をすることには女性よりも男性が向いている」というようなものがこれに当てはまる．2 つめは「愛による再生産役割因子」であり，女性には生まれつき母性愛と呼ばれる愛情が備わっており，その愛情によって女性が再生産役割すなわち家事や育児等の家事労働を担うことが，家族の成長や安心のために役立ち，しかもそうすることは女性にとって苦にならないという論理に基づいて女性の家事育児役割を正当化する因子である.「子どもが 3 歳になるまでは母親がそばにいて育てることが子供の成長にとって良いことだ」といういわゆる 3 歳児神話の考えや,「愛情があれば，家族のための家事は苦にならない」というようなものがこの第 2 因子となる．近年「男は仕事，女は家庭」という第 1 因子のような意識だけでは性別役割分業意識を把握することはできなくなっている．それは，人々が「男は仕事，女は家庭」という古くからの論理を否定しながらも,「愛による再生産役割因子」という新しい意識のもと結果的に現代日本における女性の家事育児役割を正当化するようになってきたのだと大和（1995）は指摘している．

大和（1995）はこれらの因子と男性の家事・育児参加の直接的関係については述べていないが，2 つめの因子である「愛による再生産役割因子」は女性に生まれつき家事労働を行いたい，もしくはそれに近しい気持ちがあるのではないかということを示唆するものである．これは先述の妻の家庭責任意識のような責任感とは意味合いが異なり，区別ができると捉えることができる．

（5）Maternal Gatekeeping　母親のゲートキーピング説

ゲートキーピング説は「一部の女性には家事・育児を自分の領域と捉える傾向があり，その領域の門番をしている．女性がその門戸を開くあるいは閉じる，つまり門番である妻の働きかけもしくは拒絶が夫の家事労働参加の促進または抑制する」という仮説である（石井 2013）.

また，Sarah M. Allen と Alan J. Hawkins の研究によると，次の 3 つの考えを比較的強く

抱く母親がゲートキーパーとされ，対してその考えをあまり強く持たない母親はコラボレーターと名付けられている（Sarah M. Allen and Alan J. Hawkins 1999）．①家庭内ルールを決める権限を自身が握っていたい，②母親らしさの外的承認，家事をすることが母親らしさにつながると考えている③家庭内役割の差別化を図るという 3 つの特徴である．実際にその家事労働時間を比較すると，ゲートキーパーとされる女性はコラボレーターとされる女性よりも週に 5 時間多く家事を行い，夫と家事分担を平等に担うことも少ないということがわかっている．つまり，ゲートキーパーとしての特徴のある妻をもつ夫は，家事労働参加が少なくなるという事実が認められた．夫の家事・育児への関与の少なさが，夫の意識だけでもたらされるのではなく，妻また母親の家事・育児への考え方や振るまいにもその要因があるという見解が示された．

ここまではゲートキーパーとなる母親の心的要因である．対して，父親からの外的要因としては，父親が物理的・心理的に不在で母親が過剰対応している場合（稲村 1983），「疑似母子家庭化」が促され母親ひとりに過度な期待がかかることによって母親が不安定な心理状態になることもあるようだ．厳父慈母から，甘父干母の時代になったとも言われるように，父親の不在により母親の家事・育児への固執が強まる場合もある．

1.3　本研究の目的と意義

少子化打開のための一策として意図され出現した「イクメン」という男性像であるが，これは女性に本当に求められているのだろうか．国や職場で「イクメン」への体制が整えられつつある現状と，男性の育児休暇取得率の低さとの間にはずれがあるように受け取れる．政府からもバックアップされている中，なぜもっとより多くの男性が育児休暇を取得しないのだろうか．そのような状況をつくる要因は，男性側だけにあるわけではないのかもしれない．社会的に望ましいとされるイクメンという男性像を，一番近くにいる妻である女性が望んでいない部分があるのではないか．例えば，女性が家事・育児を自分で行いたいという気持ちを持っており，男性の家事・育児参加を必要としていない等である．

そこで本研究では，男性の家事・育児参加の抑制要因のうち，女性の持つものはどのようなものか．そしてどのような要因が強い影響をもたらしているのかということを検討していく．

以上のことを明らかにすることで，メディアが既存のイクメンを肯定的に取り上げることや，イクメンを称賛する取り組みをすることに加えて，そんな男性の一番近くにいる女性，妻が男性の家事・育児参加の必要性を理解できるようなアプローチが可能となるのではないだろうか．家庭内や夫婦間で男性の家事・育児参加においての現状を理解し，その後のよりよい関係づくりに一案を提供したいと考える．

2　方法

本研究では，兵庫県尼崎市による第 2 次尼崎市男女参画計画「誰もが生きやすいまちをめざした市民意識調査」のデータを用いて分析を行う．分析には SPSS(ver.25)をする．

2.1　調査の概要

本研究の分析に用いた「誰もが生きやすいまちをめざした市民意識調査」は尼崎市における男女共同参画に関する意識の変化等を把握し，「第 3 次尼崎市男女共同参画計画」及

び「第 2 次尼崎市 DV 防止基本計画」の策定及び今後の施策展開の基礎資料とすることを目的に 2016 年 5 月に実施された．兵庫県尼崎市内に居住する 20 歳以上の男女 3,000 人を対象に，郵送での配布・回収による質問紙を用いて行われた．有効回収票はそのうち 1,024 票(女性 615，男性 389，その他 1，無回答 19)，回収率 34.1%（女性 40.6%，男性 26.2%）であった(尼崎市 2016)．

上記調査の各調査項目は，尼崎市男女共同参画計画の基本目標である「男女の人権の尊重と暴力の根絶」,「社会の制度・慣行等の見直し」,「政策・方針の企画・決定における女性の参画拡大」,「ワーク・ライフ・バランスの確立」の 4 つについて市民の意識や現状を測るように作成されている．

2.2　変数作成について

表 1　変数作成に用いた質問項目

変数		項目番号	項目内容
【A】家事・育児参加の分担	A1	問4②	「食事、洗濯、掃除等の家事」について、自分が担う割合の現状
	A2	〃⑥	「育児」について、自分が担う割合の現状
	A3	問8①	「家事育児のために仕事を抜ける（休む）のは主に私だ」について、現状
【B】妻の家庭責任意識		問2	「『男は仕事、女は家事・育児』という考え方についてどう思いますか」についてどの程度同感するか
		問5⑫	「妻は家族のために家事や育児をする責任を持つべきだと思う」についてどう思うか
		問10	優先している（せざるを得ない）ものについて ①仕事と家庭　④家庭と地域活動　⑤家庭と個人の生活
【C】妻の世帯収入貢献比率		問4①	「生活費を得ること」について、自分が担う割合の現状
【D】妻の愛による再生産役割因子		問3	「進路や職業を選択する際に、性別はどのくらい重要だと思いますか」についての考え
		問5②	「自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒をみてもらいたいと思う」についての考え
		〃④	「健康や生活に関わる事柄に敏感なのは、女性だと思う」についての考え
		〃⑥	「子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだと思う」についての考え
		〃⑧	「子どもが病気などで苦しんでいるとき、それを我が事だとして感じ取れるのは、やはり母親だと思う」についての考え
		〃⑩	「生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う」についての考え
		問11①	「男性が家事や子育て、地域活動などに参加することには抵抗感がある」について考えや現状
【E】妻のゲートキーピング説		問11③	「夫婦や家族の役割分担等について、自分の意思を尊重してもらえる」について、現状

分析にあたって用いた変数について説明する．従属変数は，変数 A「夫の家事・育児参加」である．これを変数 A1「家事参加」，変数 A2「育児参加」，変数 A3「家事・育児のために仕事を抜ける（休む）こと」の 3 つに分解した．対する独立変数は 4 つである．変数 B「妻の家庭責任意識」，変数 C「妻の世帯収入貢献比率」，変数 D「妻の愛による再生産役割因子」，変数 E「妻のゲートキーピング説」である．各変数は兵庫県尼崎市による「誰もが生きやすいまちをめざした市民意識調査」の質問項目ひとつまたは複数個から作成しており，変数を構成するのに用いた質問項目は表 1 に示したとおりである．

従属変数 A 夫の家事・育児参加については，問 4 ②「『食事，洗濯，掃除等の家事』について，自分の担う割合の現状」を問う項目を使用した．質問項目内の食事，洗濯，家事の 3 つは家事の代表的行為であると言うことができるため，家事参加の量を問うのに適切だと判断し A1「家事参加」とした．また，問 4 ⑥「『育児』について，自分が担う割合の現状」は，分析対象は子供を持つ回答者に限定されるが，本研究において育児は極めて重要であり，また直接的にどの程度育児を負担しているかを尋ねているため，A2「育児参加」の量を把握するのに使用した．A3「家事・育児のために仕事を抜ける（休む）こと」については，問 8 ①「『家事育児のために仕事を抜ける（休む）のは主に自分だ』について，現状」を用いた．これは A1，A2 と比較すれば間接的にではあるものの，家事・育児参加を測る際に有効であるという判断のもと変数作成に用いた．このように従属変数 A 夫

の家事・育児参加を A1～A3 の 3 つに分けて分析することで，従属変数と独立変数の関係をより正確に把握する．

また，分析上従属変数 A1～A3 では，回答を「妻の負担が多い」,「夫と妻の負担が半分ずつ」,「夫の負担が多い」に分類できるように操作した．このような分類ができるようにしたのは，夫婦間の家事・育児の負担の状況を的確に把握するためである．A1 家事参加の現状把握に用いた問 4②と A2 育児参加の現状把握に用いた問 4⑥は，質問紙上では「1 わたしが担うことが多い」,「2 配偶者が担うことが多い」,「3 その他家族が担うことが多い」,「4 私と配偶者が同じくらい」,「5 わたしとその他家族が同じくらい」,「6 あてはまらない」の 6 つの選択肢が用意されており，その中から自身の現状に当てはまる 1 つを選択する項目である．本研究では夫婦間の家事・育児の分担について分析をするため，選択肢「1 わたしが担うことが多い」,「2 配偶者が担うことが多い」,「4 私と配偶者が同じくらい」の 3 つを用いて「妻の負担が多い」「夫と妻の負担が半分ずつ」「夫の負担が多い」という変数を作成した．男性の回答においては,「 1 わたしが担うことが多い」を「夫の負担が多い」に,「2 配偶者が担うことが多い」で言う配偶者は妻であるため「妻の負担が多い」に置き換えた．女性の回答では「1 わたしが担うことが多い」を「妻の負担が多い」に,「2 配偶者の負担が多い」を「夫の負担が多い」に置き換えて，男女ともに「4 私と配偶者が同じくらい」を「夫と妻の負担が半分ずつ」とした．従属変数 A1 と A2 で選択肢「3 その他家族が担うことが多い」,「5 わたしとその他家族が同じくらい」,「6 当てはまらない」の 3 つは欠損値として除外した．これにより分析の対象者が絞られるが，本研究においては夫婦間の家事・育児分担を検討するために必要だと判断し実行した．

従属変数 A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの現状の把握に用いた問 8①では,「家事育児のために仕事を抜ける（休む）のは主に私だ」という問いに「1 あてはまる」,「2 ややあてはまる」,「3 あまりあてはまらない」,「4 あてはまらない」の 4 つの選択肢が用意されている．男性の回答では「1 あてはまる」を「夫の負担が多い」,「2 ややあてはまる」を「やや夫の負担が多い」,「3 あまりあてはまらない」を「やや妻の負担が多い」,「4 あてはまらない」を「妻の負担が多い」に変換した．女性の回答も同じくリコードを行い,「1 あてはまる」を「妻の負担が多い」,「2 ややあてはまる」を「やや妻の負担が多い」,「3 あまりあてはまらない」を「やや夫の負担が多い」,「4 あてはまらない」を「夫の負担が多い」とした．ここで，A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことについては，A1 家事参加，A2 育児参加と同じように夫婦間の分担を測る選択肢へと置き換えを行ったが，質問紙の質問の形式上実際は完全に夫婦二者間の分担を尋ねられておらず，他の家族メンバーが分担を担っている可能性もあることには注意が必要である．

続いて独立変数の作成についても説明する．独立変数 B 妻の家庭責任意識は，先述の通り家事や育児に対しての責任意識を指す変数である．そのため，家庭責任意識との関連が高いと思われる問 5⑫「『妻は家族のために家事や育児をする責任を持つべきだと思う』についてどう思うか」を変数 B 構成に用いた．加えて問 2「『男は仕事，女は家事・育児』という考え方」についての共感の度合いを聞くこの項目は，性別役割分業意識を問うものであり，これに強く共感する人は「女性は家庭」という意識を持っており，家庭責任意識もまた強く持つことが予想される．また問 10 では，①で仕事と，②で地域活動と，③で個人の生活と比べての家庭を優先しているかどうかを聞いている．生活の様々な場面に対し

ての家庭優先度が高いことは家庭やそこでなされる家事・育児への関心も同時に高いことにつながると仮定し，同じく変数 B 妻の家庭責任意識作成に用いた．

変数 C 妻の世帯収入貢献比率は，問 4①「『生活費を得ること』について，自分が担う現状」から，主観的ではあるものの回答者の現状を見ることができる．質問紙の選択肢は「1 わたしが担うことが多い」,「2 配偶者が担うことが多い」,「3 その他家族が担うことが多い」,「4 私と配偶者が同じくらい」,「5 わたしとその他家族が同じくらい」,「6 あてはまらない」の 6 つである．上記従属変数 A1，A2 と同じように「妻の負担が多い」「夫と妻の負担が半分ずつ」「夫の負担が多い」に回答を分類した．分類方法も同様で，男性の回答においては,「1 わたしが担うことが多い」を「夫の負担が多い」に,「2 配偶者が担うことが多い」で言う配偶者は妻であるため「妻の負担が多い」に置き換えた．女性の回答では「1 わたしが担うことが多い」を「妻の負担が多い」に,「2 配偶者の負担が多い」を「夫の負担が多い」に置き換えて，男女ともに「4 私と配偶者が同じくらい」を「夫と妻の負担が半分ずつ」とした．

変数 D 妻の愛による再生産役割因子については，問 3 「『進路や職業を選択する際に，性別はどのくらい重要だと思いますか』についての考え」，問 5 ②「自分が病気や介護を必要とするとき，やはり女性に面倒を見てもらいたいと思う」，問 5④「健康や生活に関わることがらに敏感なのは，女性だと思う」のほか，男女には生まれつき性別によって特定の何かに向き不向きがあるというような固定的な性役割振り分けのバイアスの中で女性についての質問を選んだ．それらの考え方を支持しているかを得点化することで女性（妻）の愛による再生産役割因子の強さを測っていく．

最後に変数 E 妻のゲートキーピング説についてであるが，構成質問項目に「『夫婦や家族の役割分担等について，自分の意見を尊重してもらえる』について，現状」を尋ねている問 11①を選んだ．しかしここで，問 11①はあくまでも役割分担の現状についての主観的な満足感を測る項目であり,「女性には家事・育児を自分の領域と捉える傾向があり，その領域の門番をしている．女性がその門戸を開くあるいは閉じる，つまり門番である妻の働きかけもしくは拒絶が夫の家事労働参加の促進または抑制するという仮説である（石井 2013)」というゲートキーピング説を完全に網羅する項目でないという点は留意する必要がある．

2.3　仮説

従属変数と独立変数の関係について本研究の仮説を図式化したものが図 1 である．独立変数 B 妻の家庭責任意識，C 妻の世帯収入貢献比率，D 妻の愛による再生産役割，E 妻のゲートキーピング説の 4 つはすべて従属変数夫の家事・育児参加を抑制する働きを持つと仮説のもと，兵庫県尼崎市男女参画課による社会調査データを用い分析を行っていく．変数 B 妻の家庭責任意識，変数 C 妻の世帯収入貢献比率については，先行研究からも夫の家事・育児参加を抑制するものと言うことができる．ここで，変数 C 妻の世帯収入貢献比率について，島（2011）の研究から家計貢献度の高い妻が夫の家事・育児参加を抑制するという関係性は，社会経済的地位の高い夫ではあまり見られず，夫自身の社会経済的地位が低い場合により強く当てはまる関係性であるという点には留意が必要となる．変数 B 妻の家庭責任意識については妻が家庭責任意識のもと家事・育児を多く行う傾向にあり，その結果夫の家事・育児参加が少なくなること，変数 C 妻の世帯収入貢献比率については妻の

収入が多くなることで夫が妻を稼ぎ手という自分の立場を揺るがす存在と認識し，性別役割分業意識に固執し家事・育児参加を妻に任せ自分は関与を減らす傾向にあることがそれぞれの抑制要因とされている．

変数 E 妻のゲートキーピング説については，妻が家事・育児という領域の門番をしており，夫に対してどの程度その領域への戸を開放するかを決める権限を持ちたいと考えており，そのため夫の柔軟な家事・育児参加を抑制していると言えるだろう．ここで，変数 D 妻の愛による再生産役割因子」について，性別役割分業意識を構造の中から愛による再生産役割因子を抽出した大和（1995）の論文では直接夫の家事・育児参加に影響を与えるかどうかには触れられていない．しかし，変数 D 妻の愛による再生産役割因子の得点が高ければ，大和（1995）の言った通り女性（妻）は苦に感じることなく家事労働を多く行い，そのような妻を持つ夫は妻が多くの家事労働を行うことからその家事・育児参加の量が必然的に少なくなることに繋がるという考えのもと，従属変数 A 夫の家事・育児参加の抑制要因として独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子を置いた．

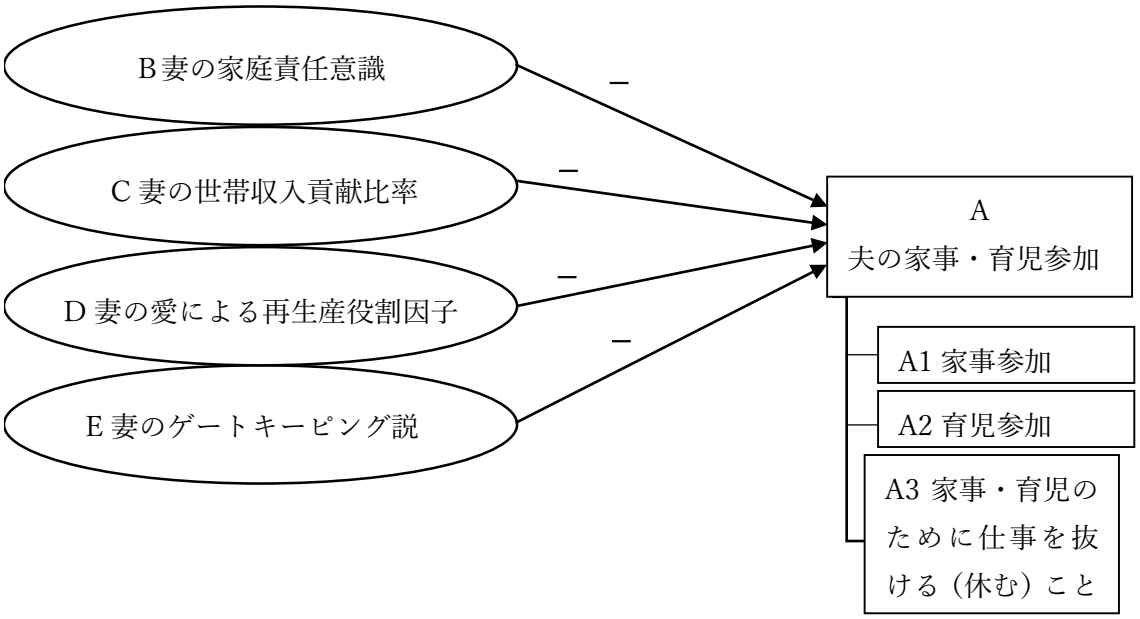

図 1　仮説モデル

3　結果

3.1　回答者の家事・育児の現状

まず初めに回答者の家事や育児の現状がどのようなものであるかをみてみると，以下の表のとおりになる．表 2 は問 4②「家庭での役割（食事，洗濯，掃除等の家事）に関するあなたの現状を教えてください.」，表 3 は問 4⑥「家庭での役割（育児）に関するあなたの現状を教えてください.」の度数分布表から作成したものである．また，変数作成についての説明で述べたように，回答を「妻の負担が多い」,「夫と妻の負担が半分ずつ」,「夫の負担が多い」に分類済みである．

表 2 回答者の夫婦間の家事分担の現状

	度数	パーセント
妻の負担が多い	657	80.2
夫と妻の負担が半分ずつ	78	9.5
夫の負担が多い	84	10.3
合計	819	100.0
欠損値	205	

表 3 回答者の夫婦間の育児分担の現状

	度数	パーセント
妻の負担が多い	400	83.0
夫と妻の負担が半分ずつ	66	13.7
夫の負担が多い	16	3.3
合計	482	100.0
欠損値	542	

現状，妻のほうが多く負担しているという回答が家事で 80.2%，育児で 83.0%と他の回答に対して最も多く，全体の 8 割以上を占めている．また夫の家事・育児参加に着目すると，育児よりは家事への参加が多い．育児に関しては妻と協力しての参加が多いように捉えられる．以上の対象者の回答から，家事・育児参加の夫婦間の分担は，妻が多く担っている場合が圧倒的に多いことが読み取れる．

3.2　多項ロジスティック回帰分析の結果

続いて従属変数 A 夫の家事・育児参加と各独立変数の関係，また，4 つのうちどの独立変数が最も従属変数に影響を与えているのかを把握するために，従属変数 A1～A3 と，独立変数 B～E の多項ロジスティック回帰分析を行った．多項ロジスティック回帰分析の結果は以下表 4～表 6 の通りである．分析において基準となる参照カテゴリは A1 家事参加を従属変数とした分析（表 4），A2 育児参加を従属変数とした分析（表 5）で「夫と妻の負担が半分ずつ」，A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことを従属変数にした分析（表 6）で「妻の負担が多い」となっている．

表 4 家事参加を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果

	妻の負担が多い				夫の負担が多い			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
切片	1.106	1.274	0.386		−3.394	2.200	0.123	
B妻の家庭責任意識	−0.226	0.135	0.094*	0.798	−0.006	0.203	0.975	0.994
C妻の世帯収入貢献比率	0.284	0.251	0.257	1.329	−0.680	0.379	0.073*	0.507
D妻の愛による再生産役割因子	0.227	0.070	0.001***	1.255	0.286	0.109	0.008***	1.332
Eゲートキーピング説	−1.490	0.453	0.001***	0.225	−0.955	0.677	0.159	0.385
Nagelkerke R2乗	0.160				0.160			

注）***:p<0.01 **:p<0.05 *:p<0.1

参照カテゴリは「夫と妻の負担が半分ずつ」

表 5　育児参加を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果

	妻の負担が多い				夫の負担が多い			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
切片	1.267	1.538	0.410		−2.091	2.866	0.466	
B妻の家庭責任意識	−0.078	0.148	0.599	0.925	−0.079	0.243	0.744	0.924
C妻の世帯収入貢献比率	0.154	0.293	0.598	1.167	−0.485	1.124	0.289	0.616
D妻の愛による再生産役割因子	0.143	0.076	0.060*	1.153	0.247	3.526	0.060*	1.281
Eゲートキーピング説	−2.194	0.522	0.000***	0.112	−2.361	7.481	0.006***	0.094
Nagelkerke R2乗	0.197				0.197			

注）***:p<0.01 **:p<0.05 *:p<0.1

参照カテゴリは「夫と妻の負担が半分ずつ」

表 6　家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことを従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果

	どちらかというと妻の負担が多い				どちらかというと夫の負担が多い				夫の負担が多い			
	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
切片	−1.683	1.276	0.187		−1.560	1.949	0.423		0.255	1.119	0.820	
B妻の家庭責任意識	0.042	0.120	0.726	1.043	−0.193	0.179	0.281	0.824	0.161	0.114	0.158	1.175
C妻の世帯収入貢献比率	0.198	0.241	0.412	1.219	0.660	0.419	0.115	1.934	−0.860	0.215	0.000***	0.423
D妻の愛による再生産役割因子	−0.021	0.062	0.739	0.980	−0.032	0.091	0.729	0.969	−0.053	0.054	0.328	0.949
Eゲートキーピング説	0.420	0.371	0.258	1.521	0.771	0.569	0.175	2.161	0.313	0.362	0.388	1.367
Nagelkerke R2乗	0.163				0.163				0.163			

注）***p<0.01 **p<0.05 *p<0.1

参照カテゴリは「夫と妻の負担が半分ずつ」

以下分析結果についての説明に用いるβ値は回帰係数のことである.回帰係数は回帰直線の傾きとも言われ,付く符号が＋であれば正の影響,－であれば負の影響を従属変数に対して有していることを示す.また,その値が大きいほど影響力が強い.

まずは従属変数 A1 家事参加についての多項ロジスティック回帰分析の結果について述べる．家事参加において「夫と妻の負担が半分ずつ」である世帯に対して，独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率得点（βが-0.680，Exp(β)が 0.507）が低く，また独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子得点（βが 0.286，Exp(β)が 1.332）が高いほど「夫の負担が多い」状況になりやすいことがわかった．また，独立変数 B 妻の家庭責任意識得点（βが-0.226，Exp(β)が 0.798）と独立変数 E 妻のゲートキーピング説得点（βが-1.490，Exp(β)が 0.225）が低く，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子得点（βが 0.227，Exp(β)が 1.255）が高いほど「妻の負担が多い」傾向にあった．家事参加において，「夫の負担が多い」と独立変数 B 妻の家庭責任意識，独立変数 E 妻のゲートキーピング説は有意とは言えず，「妻の負担が多い」と独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率も同じく有意差はみられなかった．以上，夫と妻それぞれの家事参加と各独立変数の関係を図式化したものが図 2，図 3 である．

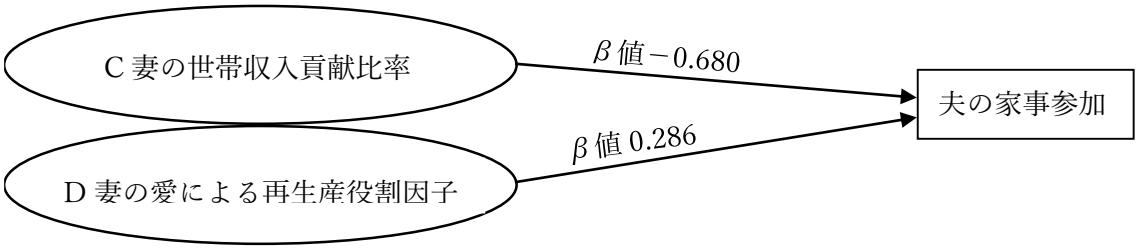

図 2　変数 C,D が夫の家事参加に与える影響

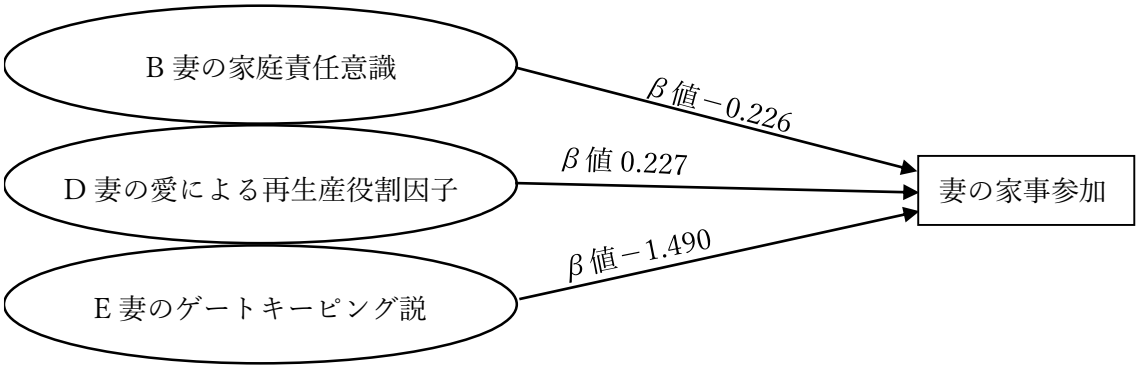

図 3　変数 B,D,E が妻の家事参加に与える影響

続いて，従属変数 A2 育児参加についての多項ロジスティック回帰分析の結果では，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子，独立変数 E 妻のゲートキーピング説のふたつが妻と夫どちらの育児参加の量とも有意さがみられた．育児参加において「夫と妻の負担が半分ずつ」と答えた回答者に対して，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子得点（β が 0.247，Exp(β)が 1.281）が高く，独立変数 E 妻のゲートキーピング説得点（β が-2.361，Exp(β)が 0.094）が低いほど「夫の負担が多い」状況になりやすいことが読み取れる．「妻の負担が多い」については，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子得点（β が 0.143，Exp(β)が 1.153）が高く，独立変数 E 妻のゲートキーピング説得点（β が-2.194，Exp(β)が 0.112）が低い人々がそれに該当していた．そのように，「妻の負担が多い」と「夫の負担が多い」の状況両方に対しての独立変数の働きかけが同じという結果が認められた．この結果には考察が求められる．育児参加について，「夫の負担が多い」，「妻の負担が多い」のどちらも独立変数 B 妻の家庭責任意識，独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率のふたつとは有意ということはできなかった．図 4，図 5 は育児分担についての多項ロジスティック回帰分析の結果を図式化したものである．

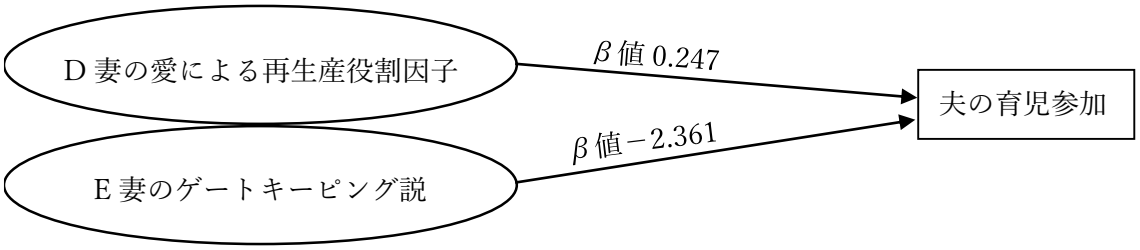

図 4　変数 D,E が夫の育児参加に与える影響

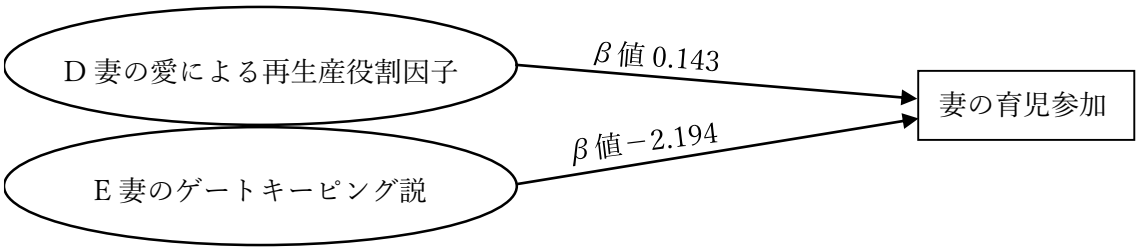

図 5　変数 D,E が妻の育児参加に与える影響

続いて A3「家事・育児のために仕事を抜ける（休む）こと」を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析では，基準とした「妻の負担が多い」という状況にある回答者と比較して，独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率得点（β が-0.860，Exp(β)が 0.423）が低いほど，「夫の負担が多い」状況になりやすいことがわかった．「夫の負担が多い」と独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率に有意差がみられた他は，従属変数 A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことと各独立変数は有意とは言えなかった．

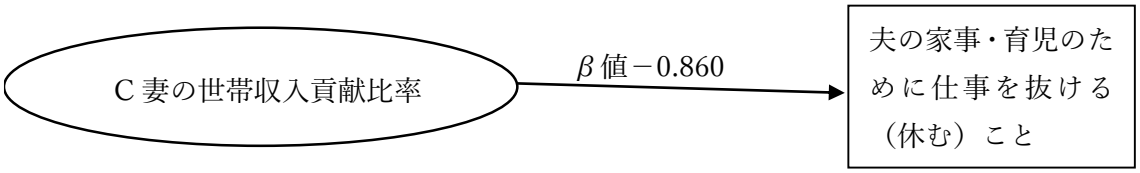

図 6　変数 C が夫の家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことに与える影響

ここまでに述べた従属変数 A「夫の家事・育児参加」と B~E の 4 つの独立変数の関係についての分析結果を，本研究のリサーチクエスチョンである夫の家事・育児参加の抑制要因は何か，という観点からまとめる．「妻の負担が多い」を促進する独立変数，「夫の家事負担が多い」を抑制する独立変数がその答えにあたる．変数 A1「夫の家事参加」を抑制しているのは変数 C 妻の世帯収入貢献比率と変数 D 妻の愛による再生産役割因子，変数 A2「夫の育児参加」を抑制しているのは変数 D 妻の愛による再生産役割因子と変数 E 妻のゲートキーピング説であった．変数 A3「家事・育児のために仕事を抜ける（休む）こと」を抑制しているのは変数 C 妻の世帯収入貢献比率となった．

反対に従属変数 A「夫の家事・育児参加」を促進している独立変数，すなわち「妻の負担が多い」を抑制しているあるいは「夫の負担が多い」を促進している独立変数についてもまとめたい．変数 A1「夫の家事参加」においては変数 B 妻の家庭責任意識と変数 D 妻の愛による再生産役割因子，変数 E 妻のゲートキーピング説の 3 つがそれにあたる．変数 A2「夫の育児参加」では変数 D 妻の愛による再生産役割因子，変数 E 妻のゲートキーピング説，変数 A3 では該当する独立変数無しとなった．これらも仮説では夫の家事・育児参加を抑制すると思われたが，分析の結果仮説とは反対の夫の家事・育児参加を促進する働きをしていたことが判明した．

また，従属変数である夫の家事・育児参加の抑制要因を「妻の負担が多い」を促進する独立変数と「夫の負担が多い」を抑制する独立変数両方，非抑制要因を「妻の負担が多い」を抑制する独立変数と「夫の負担が多い」を促進している独立変数の両方とする点においては留意が必要である．前者の夫の家事・育児参加の抑制要因の場合では，「妻の負担が多い」分担状況を促進することは，直接的に「夫の負担が多い」を抑制する影響力を持つとは言えないが，少なくとも家事や育児等の分担を妻が多く担うことは夫の分担を減少あるいは抑制すると言うことができると判断した．

各独立変数が夫の家事・育児参加を仮説の通り抑制するあるいは促進するというどちらの効果を持っているのかがわかったところで，各独立変数の効果の強さを比較する．各独立変数が従属変数 A 夫の家事・育児参加に与える影響力の強さを β 値で比較した結果を図 7 に示した．従属変数を抑制している独立変数を図の左側，促進している独立変数を図の右側に記した．抑制要因はその影響力が大きい順に，変数 E 妻のゲートキーピング説が β 値 2.361，変数 C 妻の世帯収入貢献比率が β 値 1.540，変数 D 妻の愛による再生産役割因子が β 値 0.370，夫の家事・育児参加を抑制していた．また，リサーチクエスチョンではないものの促進要因においても強さを比較していくと，変数 E 妻のゲートキーピング説が β 値 3.684，変数 D が β 値 0.533，変数 B 妻の家庭責任意識が β 値 0.226 という順番に夫の家事・育児参加を促す力が大きかった．

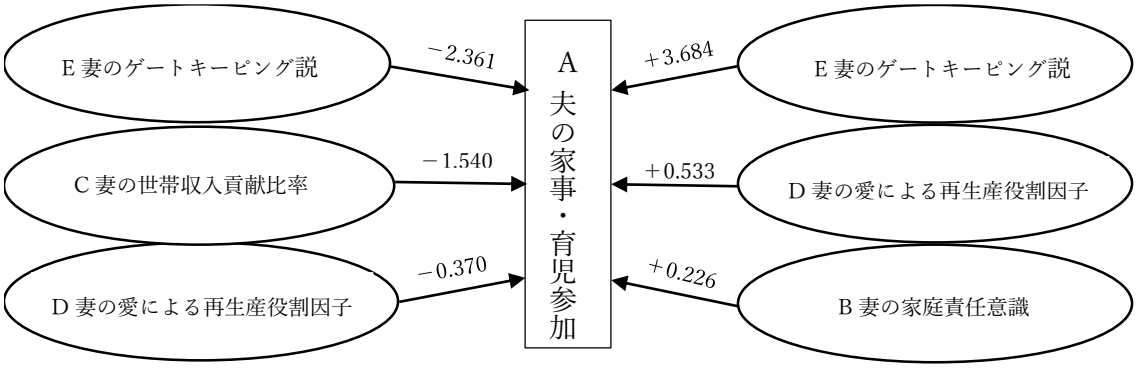

図 7 従属変数 A 夫の家事・育児参加への各独立変数の影響力の強さ比較

4　考察

ここまで，男性の家事・育児参加の抑制要因のうち，女性の持つものはどのようなものか．そしてどのような要因が強い影響をもたらしているのかというリサーチクエスチョンのもと，従属変数 A 夫の家事・育児参加（A1 家事参加，A2 育児参加，A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの 3 つに分解）に対して 4 つの独立変数（B 妻の家庭責任意識，C 妻の世帯収入貢献比率，D 妻の愛による再生産役割因子，E 妻のゲートキーピング説）を作成し，兵庫県尼崎市男女参画課による社会調査データを用いて分析してきた．ここから，分析の結果を検討していく．

従属変数 A1 家事参加については，男性の家事参加を抑制したのは独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率と独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子であり，このふたつについてはそれぞれ島（2011）,大和（1995）の研究の通りの働きかけがみられた．しかし，独立変数 B 妻の家庭責任意識，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子，独立変数 E 妻のゲートキーピング説の 3 つでは夫の家事参加をむしろ促進しているという結果を得た．ここで独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が夫の家事参加を抑制しているとも促進しているとも受け取れた．その得点の高さが「妻の負担が多い」,「夫の負担が多い」双方を促していたのだ．ひとつとして，ここでは独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子そのものが夫の家事参加を促進したのではなく，回答した夫たちに望ましさバイアスが働いたと考察する．愛による再生産役割因子を強く抱く妻を持つ彼らは，家事の分担を多くは担っていない現状を答えづらかったのではないだろうか．しかし，この考察が正しいとするならば，夫の家事・育児参加を抑制する有意な関係が分析の他の箇所で見られたことが説明できないため，今後に再考の余地を残すと言えるだろう．本研究で独立変数 B 妻の家庭責任意識が夫の家事参加を抑制する働きがみられず，反対に促進した理由として，妻の家庭責任意識の抱き方に変容があったことが考えられる．家庭責任意識は中川（2010）等の先行研究で家事や育児に対する責任感と意味づけられ，家庭責任意識を強く持つ女性といえば当然彼女たち自身がそうした家事・育児が行うことについての責任感を抱いていると解釈されてきた．しかし，時代とともに女性の社会進出が進み，家庭外で仕事をして一家の稼ぎ手を夫とともに担う妻が増えたことで，彼女たちは「自分で」と言うより「夫婦（家族）で」家事・育児をやり遂げようという責任感や使命感のもと，積極的に夫に家事を分担するよう働きかける傾向にあり，結果夫の家事参加を促進する現状に至ったと考える．

また，独立変数 E 妻のゲートキーピング説が夫の家事参加を促していたことについては，先述で留意した通り今回の変数作成において独立変数 E 妻のゲートキーピング説は夫婦間の家事労働分担への主観的満足度を問う質問項目から構成されており，完全に理論を立証するには不十分である．夫婦の家事分担の現状に自分の意見が反映されており満足しているという妻や，そのために夫に家事分担について相談なりお願いをする妻が本調査において妻のゲートキーピング説得点の高い妻であると推測され，結果彼女たちの夫の家事負担が「夫と妻の負担が半分ずつ」である夫婦の夫より多くなったことが考えられる．

従属変数 A2 夫の育児参加では「妻の負担が多い」,「夫の負担が多い」という回答者で相反する結果が得られた.「妻の負担が多い」という人々を見ると独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が夫の育児参加を抑制，独立変数 E 妻のゲートキーピング説が夫の育児参加を促進しているという結果が得られたのに対して,「夫の負担が多い」という人々からは独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が夫の育児参加を促進しており，独立変数 E 妻のゲートキーピング説が夫の育児参加を抑制しているという結果がみられた．前者「妻の負担が多い」について，独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が夫の参加を抑制，独立変数 E 妻のゲートキーピング説が夫の参加を促進していることは，家事参加の多項ロジスティック回帰分析でも同様の結果が得られており，家事・育児という類似の事柄についての分析であることからこの結果には正当性があるように思われる．そのため，育児参加で「夫の負担が多い」ことを独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が促進しているというのは，家事参加で「夫の負担が多い」ことを独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子が促進していることへの考察と同じく，実際は参加が抑制されている夫に望ましさバイアスが働いたことを理由と考える．また,「夫の負担が多い」状況を独立変数 E 妻のゲートキーピング説が抑制していることに関しては，妻の育児分担への考えが，家事分担に向けたものとは異なることが考えられる．独立変数 E 妻のゲートキーピング説は，育児参加において「妻の負担が多い」という回答者では夫の参加を抑制,「夫の負担が多い」という回答者では夫の参加を促進していたが，その β 値はそれぞれ 0.143 と 0.247 と夫の参加を促進する影響力のほうが 0.104 大きい．家事労働時間についての現状で既述したように，6 歳未満の子を持つ世帯の妻は，過去 20 年間で家事時間が 1 時間 1 分減少する一方，育児時間が 1 時間 2 分増加しており，時間配分する中で家事よりも育児に時間を割く傾向にある．そのため，独立変数 E 妻のゲートキーピング説得点の高い妻は夫婦間の家事・育児等の家事労働の分担に満足しており，その夫婦間の家事・育児の分担とは，夫に家事を負担してもらうことで自分の育児時間が確保できる状況を生み出すというものなのではないだろうか.

従属変数 A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの分析では，独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率が低いほど，つまり妻の収入が少ないほど夫の負担が多くなるという結果を得た．独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率に注目すると，A1～A3 の 3 つの従属変数のうち従属変数 A1 夫の家事参加と従属変数 A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの 2 つにおいて夫の参加を抑制しているという結果が出た．従属変数 A2 夫の育児参加との関係は有意とは言えなかったが，妻の収入が多いことは夫の家事・育児参加を抑制すると言えるだろう．仮説の通りの結果が得られたものの，世帯収入貢献比率の高い妻は，世帯収入貢献比率が低い妻よりも家庭外での労働時間が多いことが推測され，その分夫との家事・育児分担がなされていても不自然ではない．だが本研究の分析ではそのよ

うな結果は認められなかった．先行研究の通りとはいえ，家事労働時間が限られる働く妻の家事・育児負担が多いことは，夫婦間の分担に課題があると思われる．しかし，仕事を抜ける（休む）ということには，子供の体調不良で当日旧居という可能性もあれば，授業参観や運動会などの事前から決まっている学校行事等様々なものが考えられる．男性のほうが個性よりも労働者全体における正規雇用者の割合が大きいこと等を考慮すると，従属変数 A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことにおいて妻の負担が多いことは，従属変数 A1 家事参加や従属変数 A2 育児参加においての妻の負担が多くなることと比較すれば致し方ないとも言える．原因として，島（2011）による先行研究のとおり世帯収入貢献比率の高い妻を持つ夫は妻を脅威として捉え，その現状に意識を規定され性別役割分業意識に固執するようになり，家事労働は女性が行うものだという意見のもと自身は家事・育児に参加しないということが考えられる．またもうひとつ，世帯収入貢献比率の高い，家庭外で長く時間を過ごすであろう妻は，収入の面で貢献しているという気持ちよりも，家庭に費やす時間が限られることへの罪悪感から，かえって多く家事・育児を行っているのではないかと考察される．罪悪感という言葉であるが，近年専業主婦への否定的意見もメディアで取り上げられている．ニュース番組で，専業主婦への厳しい声や，専業主婦が抱く自身の立場への罪悪感について特集されていたのを目にした．J-STAGE で「専業主婦」を査読ありの条件を付けて検索した結果，ヒットしたのは 54 件と少なく，また専業主婦であること自体についての心理状態についての研究は見つからなかった．学術的には言及されていないとはいえ，メディアが着目するほどの一定の声があることは事実であり，女性は家庭外に仕事を持とうが持つまいが自分の家事・育児においての現状に葛藤を抱く傾向にあると言える．

5　結論

本研究では，少子化打開策のために国から推奨される男性の育児参加，働く男性も女性と同じように育児休暇を取得できる法律改正，メディアで好感的に取り上げられるイクメンという男性像，そのような状況の中で実際に育児休暇を取得している男性は 2017 年度で 5.14%(総務省 2018)となっている現状に疑問を抱き，について考え男性の家事・育児参加の抑制要因を考えてきた．特に，兵庫県尼崎市男女共同参画課によって実施された「誰もが生きやすいまちをめざした市民意識調査」の社会調査データを用いて男性の家事・育児参加の抑制要因を分析した．独立変数は B 妻の家庭責任意識，C 妻の世帯収入貢献比率，D 妻の愛による再生産役割因子，E 妻のゲートキーピング説の 4 つを上記調査の質問項目から作成した．結果，B 妻の家庭責任意識は A1 の家事参加，A2 の育児参加，A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの 3 つそれぞれを従属変数とした多項ロジスティック分析全てで夫の家事・育児参加を抑制しているという結果は得られなかった．独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率においては従属変数 A1 家事参加，A3 家事・育児のために仕事を抜ける（休む）ことの 2 つにおいて夫の参加を抑制しているという結果となった．独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子は夫の家事・育児参加を抑制するが，この D 愛による再生産役割因子得点においては A1 家事参加，A2 育児参加ともに男性たちに望ましさバイアスによると思われる回答が見られた．独立変数 E 妻のゲートキーピング説は夫の家事・育児参加において，A1 家事参加を促進し A2 育児参加を抑制する効果を持つという結果を得た．以上のことから，本研究において男性の家事・育児参加を抑制する要因と

して得られたものは独立変数 C 妻の世帯収入貢献比率と独立変数 D 妻の愛による再生産役割因子の 2 つであり，独立変数 E 妻のゲートキーピング説は男性の育児参加においてその参加を抑制していることが明らかにされた．

最後に本研究の 2 つの問題点について述べる．ひとつめは先述した通り独立変数 E 妻のゲートキーピング説が Sarah M. Allen と Alan J. Hawkins による理論を完全にカバーしきれていないという点である．独立変数 E は妻が抱く夫との間の家事・育児分担に対する満足度の度合いであり，ゲートキーピング理論と男性の家事・育児参加の関係の詳細については今後研究する余地がある．2 つめの問題点に，育児をする上で，夫婦間以外の分担の形態をとる世帯が多いことが挙げられる．表 3 で育児の分担についての度数分布を示したが，欠損値が 542 と，「妻の負担が多い」という回答の 400 を上回っている．ここで欠損値は夫婦間ではなく，その他の家族や保育所等の外部との育児分担をしている人々での回答を指すと推測できる．つまり，従属変数 A1~A3 において「妻の負担が多い」状況にあると回答した人のほかにも，夫以外と育児分担をしておりまたその分担は自分のほうが多いという現状を抱える妻がいることが示唆される．勿論，夫においてもその可能性はあるが，その数は女性のほうが多いと考えられる．家事や育児について検討する際，妻と夫，母親と保育機関といった 2 者間の関係だけでなく，多角的に分析することが正確な現状の把握，改善につながると言えるだろう．

【参考文献】

尼崎市,2016,「男女共同参画社会をめざした市民意識調査報告書」.
(www.city.amagasaki.hyogo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/317/h28siminnhoukokusyo.pdf)

朝日新聞デジタル,「ワンオペ育児とは」,コトバンク
(https://kotobank.jp/word/ワンオペ育児-1736392#E7.9F.A5.E6.81.B5.E8.94.B5mini)

服部良子,1993,「V 生活の中の労働と家事労働」,社会政策叢書 17 巻 p99-124

稲村邨博,1983,『思春期挫折症候群』,新曜社

石井クンツ昌子,2013,「『育メン』現象の社会学―育児・子育て参加への希望を叶えるために―」,ミネルヴァ書房

厚生労働省, イクメンプロジェクトホームページ
(2017 年 7 月取得,https://ikumen-project.mhlw.go.jp/project/about/)

久保桂子,2016,「共働き夫婦における夫の家事・育児参加に対する妻の評価」,日本家政学誌 vol67 No.8,p447~454

中川まり,「子育て期における妻の家庭責任意識と夫の家事・育児参加」,2010,家族社会学研究,22(2):201-202

Sarah M. Allen and Alan J. Hawkins, "Maternal Gatekeeping: Mothers' Beliefs and Behaviors That Inhibit Greater Father Involvement in Family Work on JST", Journal of Marriage and Family, Vol. 61, No. 1 (Feb., 1999), pp. 199-212

島直子,2011,「妻の家計貢献が夫の星月役割分業意識に及ぼす影響―夫の社会経済的地位による交互作用―」,家族社会学研究,23(1)53-64

総務省統計局,「平成 28 年社会生活基本調査結果」
(2018 年 10 月取得, www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html)

総務省統計局,「平成 29 年労働力調査結果」
(2018 年 10 月取得, www.stat.go.jp/data/roudou/inyou.html)

大和礼子,1995,『性別役割分業意識の二つの次元「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」』